

吉野秀雄全集

第三卷

筑摩書房

吉野秀雄全集第三卷

昭和四十四年八月七日第一刷発行
昭和五十二年五月二十日第二刷発行

著者 吉野秀雄

発行者 井上達三

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号 一〇一―九一

電話 東京(三六)七六五一(代表)
振替 東京六一四一二三

印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替いたします

吉野秀雄全集第三卷

目次

鹿鳴集歌解

緒言……………三

南京新唱 九十八首……………六

南京余唱 四十二首……………八

南京統唱 十四首……………三七

比叡山 十二首……………三六

觀仏三昧 二十八首……………四三

旅愁（抄） 三首……………四六

秋艸道人のこと

現代短歌鑑賞 —— 会津八一の歌から……………一五

秋艸道人仏像歌頌釈……………一六

秋艸道人会津八一博士……………一八

会津八一先生を偲ぶ……………二〇

秋艸道人と鎌倉……………二七

秋艸道人……………	二〇二
西条における秋艸道人……………	二〇六
会津八一の思ひ出——上州小旅行の頃——……………	二三三
飽くことを知らしめず——『会津八一の書』書評——……………	三〇〇
秋艸道人書論の一種……………	三三三
秋艸道人の偽筆……………	三六六
武蔵野の歌碑……………	三六八
秋艸道人の俳句……………	三七一
会津八一の俳句俳論……………	三八〇
青年教師としての会津八一……………	三八五
若き日の会津八一先生……………	三九五
秋艸道人歿後十年……………	三七〇

現代短歌論

写生の実行について……………	二四三
正岡子規と長塚節……………	二六七
長塚節の手簡……………	二五五

今井邦子さんのこと……………	三〇二
与謝野晶子歌碑……………	三〇六
伊豆小話——『溪流唱』について……………	三〇七
宮柊二の作品——『群鷄』読後感……………	三二五
宮柊二歌集『多く夜の歌』……………	三三一
佐藤佐太郎素描……………	三三三
追悼的些事二三——吉井勇さんのこと……………	三四四
病床にゐて思ひ出すこと——尾山篤二郎追悼記……………	三四九
川田順大人の思ひ出……………	三五三
病床に読む茂吉の歌……………	三五五
土屋文明作品「美濃懷旧懷古」を読んで……………	三六九

現代俳句私観

年輪……………	三六五
虚子俳句門外観……………	三六六
虚子翁の思ひ出……………	三七三
松本たかし私観……………	三七六

たかし句集『石魂』読後……………	三九
松本たかし追悼録……………	四〇
たかしの才と写生……………	四一
鎌倉のたかし庵……………	四二
松本たかしのみちのく便り……………	四三
松本たかし雑感……………	四四
『火明』の一句……………	四五
松本たかし……………	四六
句集『球磨』について……………	四七
上村占魚鑑賞……………	四八
占魚近作愚評……………	四九
賢句愚評……………	五〇
『みそさざい』六月号の雑詠を読んで……………	五一
手紙代り……………	五二
返 事……………	五三
『みそさざい三十三人集』を読む……………	五四
爽雨俳句漫抄……………	五五
雪解俳句素人観……………	五七

『雁列』をひもといて……………	五〇
続・爽雨句集『雁列』鑑賞……………	五〇
続々・爽雨句集『雁列』鑑賞……………	五九
『寒柝』私抄……………	六三
応需雪解句評……………	六三
『雪解』の巻頭句を読む……………	六三

詩人思慕

朔太郎思慕……………	六三
『芳水詩集』のこと……………	六七
回顧的感想——高橋元吉の世界——……………	六八
或る老詩人のこと……………	七〇
高橋元吉さんのこと……………	七三
高橋元吉さんの晩年……………	七六

二人の小説家

明るい愛情……………	三五
『旅路』解説……………	三七
大仏次郎さん近況……………	六四
『風船』解説……………	六七
谷崎潤一郎をおもふ……………	七〇
潤一郎哀悼続話……………	七二
解題……………	七九

吉野秀雄全集第三卷

作品論・作家論

鹿鳴集歌解

緒言

一、この小著は、秋艸道人会津八一氏の歌集『鹿鳴集』の中、大和を主とし、河内・山城にも及ぶ旧蹟・寺塔・絵画・彫刻等に関する作に、いささか註釈を施し、鑑賞を試みたものである。道人の歌集は、既刊四冊の中、春陽堂版『南京新唱』・私家版『南京余唱』・創元社版『鹿鳴集』と三冊まで巻名奈良に関はつてゐるところからみても、本書の主たる対象とした大和地方の歌が、道人の作品の最も特色ある部分を蔽ふものなることはいふを俟たぬであらう。

一、本書の台本としては、創元社発行の創元選書版『鹿鳴集』を用ゐ、歌には順序に従つて「」印の番号をつけて読者前後参照の便とし、また初句索引及び目次細目を巻末に附載しておいた。

一、本書に取扱つた歌は、『鹿鳴集』の中、

南京新唱	九十八首
南京余唱	四十二首
南京続唱	十四首
比叡山	十二首
観仏三昧	二十八首

旅 愁（抄） 三 首

の合計百九十七首である。

一、今人のしかも現存の歌人の家集について、総計三百三十二首中二百首に近き多数を評釈して一書をなすといふのは世上あまり類例のないことでもあらうが、しかし私が敢てこれを顧慮せぬのは、道人の奈良歌を好んで実に止みがたきおもひに駆られるからに外ならない。それにまた、これらの作品は製作の時期からいつて明治四十一年にまで遡るもの二十首を数へ、且つその暢達醇熟の歌品に見てもすでに半ば古典化さうとしてゐる底（こ）のものであり、明治・大正・昭和を通じてどれだけの歌集が後世に残るにもせよ、『鹿鳴集』が優にその中の一冊として、一般短歌愛好者殊に奈良美術憧憬者の絶えぬかぎり諷誦さるべきことは略々確実だからである。

一、道人は先年親ら自歌解釈の文章十数篇をものされ、『渾斎随筆』と題して創元社これを行行し、世に名著の聞えを博してゐる。この著すでにあるに自分がさらに贅註を加へるのは、いかにも心なき業のやうであるが、しかし私はひたすら鑑賞者としての立場にあつて、原作者自身には述べがたい一首々々の妙趣を説くことに主眼をおかうとする者であり、むしろ『渾斎随筆』に学ぶところのあつた人々に向つて親しくものいふ氣持で筆を執つた次第である。

一、書を読んで甚解を求めずと古人もいましめたが、まして詩歌においてをや。さりながら一面短歌の如き短詩型芸術は、一つの三爾乎波（てにま）をも一大事として、きびしく追求しなければ到底真の理解には到達し得ないことを銘記すべきである。そして仮に本書にいくらかの取柄があ